一寸の虫にも互分の魂 ～槐安国のシシャ!?

室蘭市医師会
本輪西ファミリークリニック
北海道家庭医療学センター
佐藤弘太郎（さとうこうたろう）

“五分”の魂が本来であるが、タイトルの“互分”は誤植ではない。

大変個人的な話となるが、しばらくお付き合いいただきたい。約30年前の夏休み、私は神奈川県にあるA野高校の３年生であった。与えられたテーマを題名に小論文を書く宿題があり、「一寸の虫にも五分の魂」というテーマを私は選んだ。文章の内容はさておき、机の電気スタンドに飛んでくる虫を無意識に潰すことに抵抗を覚えることから着想をえて作文した。それ以降の人生で私は、室内で見つけた虫もできる限り屋外に逃がすようにして、虫を不用意に殺さないことを１つの暗黙のルールのようにして過ごしてきた（例外：カメムシは布ガムテープを使用しています）。

さてX年５月15日の朝に起きた体験についてお話をしたい。福井県へ出かけた際、永平寺へ行った。６時からの朝のお勤めの見学が７時過ぎに終わり、８時半の見学開始まで時間があった私は、建物内部で待つことができないことをお坊さんから告げられ、時間があるなら寂光苑に行ってみたら、と助言をいただいた。そこで永平寺を左手に見て川沿いを歩いていくと、道元禅師の銅像や鐘楼、歴代のお坊さんたちのお墓が祀られている場所に辿り着いた。厳かな雰囲気の中、最深部のお堂まであゆみを進めてお参りし、その後引き返すかたちで鐘楼がある小広場まで戻り、ベンチで８時半まで待つことにした。

ベンチに座り、小腹も空いたので栄養バーを食べながら、今回の見学に際して持参した「正法眼蔵入門（頼住光子著）」を読んでいた。すると右目の視野の隅に、蟻が動いているのを認めた。よくよくその蟻を見ると、動きが鈍い。瀕死のようだった。状況から考えると私が気づかない間に踏んだのだろう。自分としてはベンチに腰掛けて本を読んでいただけなのにも関わらず、なんと蟻を踏んで瀕死に追いやった！ことに衝撃を受けた。さらにその蟻は、なおも歩こうともがいていた。

ふと突然、瀕死の蟻と自分の存在の間に何一つ違いがなく、それが入れ替わろうが不思議ではなく、自分もいつ蟻のように瀕死になるとも知れない、と思わさった。可哀想というよりはお互い様、そもそも同一の存在の中の裏表、のような感覚である。とても不思議な感覚だった。私が瀕死の蟻を見ているのか、瀕死の蟻が私を見ているのか、なんとなく１つの舞台の上で蟻と私が演技をしているかのような、感じだ。さらにその舞台自体が私自身でもあるかのような感じである。そのような全体と個をまるごといっぺんに捉える視座から、世界をありのままに見ることで、それぞれのエネルギーが溢れている、と感じられた。そしてそのエネルギーとつながって存在している宇宙の中の一閃としての自分なのである。虫も私もお互いに存在しあっているのである。私なりの理解としては「無一物中無尽蔵」という禅語の意味するところで、何者でもないけれども、何者にでもなるのである。

「一寸の虫にも五分の魂」とは、小さく弱いものでもそれ相応の分別や覚悟を持っているという意味だが、「一寸の虫にも互分の魂」というのは私の造語である。虫が弱く人間が強いということではなくて、両者がお互いから発揮されている魂のようなものを共有し合い不可分なのである。そのようなモードで世界を感じる時、森や雲の輝かしさがまぶしく、自分の存在はただ今そこに立ち、過去も未来もそこにある感覚になる。このモードを「孤独・セルフネグレクト」の診療にどのように実装するかは、私の取り組んでいるテーマの１つであるが、医療者と患者の双方がお互いの存在のつながりをふんわり活かすかたちでの実践となるのだろう。

蛇足だが、槐安国とは、夢物語の蟻の国の名前である。会員のひろばを利用して、私の気づきを活字としてまとめさせていただきました。駄文で甚だ恐縮でしたが、ここまでお付き合いいただきどうも“あり”がとうございました（合掌）。